

## &lt;前回：哲学と神学、キリスト教神学の起源&gt;

Q：キリスト教神学とはその起源に即して考えれば何か。

神学と哲学は分離できるか。

## (1)「ヘレニズムとヘブライズム」という問題設定

哲学／神学／信仰の相互的緊張的な関係性 → 動性・プロセス

1. キリスト教的な神思想は、キリスト教的伝統を構成する複合性。19世紀以来、マシュー・アーノルド、「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論。

2. キリスト教神学の形成過程

ハルナックがキリスト教のギリシャ化と述べた事態であるが、しかし同時に、それはギリシャ・ローマ文化世界のキリスト教化でもあった——ダルフェルスが述べるように、<sup>(3)</sup>キリスト教神学は先行するギリシャの哲学的な神学を学的基礎としつつ、キリスト論によって哲学的な神学を変革したのである——。キリスト教思想における絶対的なものへの問いは、古代ギリシャの形而上学と聖書の思惟という二つの伝統の動的な緊張関係に即して、論じられねばならない。これが、本章の課題にほかならない。

3. ハヤ・オントロギア

有賀鐵太郎は、ヘレニズムとヘブライズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして分析した上で、キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ・オントロギアと説明している。

## (2) 哲学の一部門としての神学 → キリスト教神学へ

5. 神学は古代ギリシャ哲学起源である → キリスト教・教父

- ・神学とは本来哲学(より厳密には古代ギリシャ思想)の一部門である。
- ・神学自体がギリシャ起源であり、キリスト教化されることで、キリスト教神学となった。

Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*.

パネンベルク『学問論と神学』教文館。

「序論 学問論と神学」の「第二節 神学の学問性要求の起源」

6. プラトンの自然神学(『法律』第10巻) = 自然神学の原型

7. ロゴス論の場合：ヘラクレイトス、ストア、フィロン → 新約聖書・教父

・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

↓

宗教、政治、自然学・形而上学は、相互に区別されつつも、知的世界を構築している。

## (3) キリスト教神学と哲学との区別と重なり

8. キリスト教・キリスト教思想は、二つの源泉の相互関係において理解する必要がある。

この相互関係の文脈が、古代地中海世界(その精神状況)であり、宇宙論的タイプの宗教の伝統が普及している地域であったことの意義。→ 現代までの規定要因の一つ。

- ・自然神学は宗教に関わる哲学的思惟に属する。
- ・キリスト教神学は、神学の学的基盤をめぐる議論を介してキリスト教神学と緊密な連関を有する。

9. 信仰と哲学との関係。単純な二分法は可能か。

「論証」(argumentum, demonstratio)とは何か。信仰なしの合理性？

・トマス『神学大全』第一部第二問第三項「神は存在するか」。

有名な「五つの道」による宇宙論的な神の存在論証。

神の存在は論証の対象であり、トマスは神の創造行為の結果(創造された世界)から原因としての神を認識するという論証方法(事実による論証)を採用するわけであるが、この信仰箇条の前提である言われた論証の事柄は、場合によっては信ずべき事柄として取

り扱われてもよい。

啓示と理性とは区別されつつも、交差している。これは、一つの事柄に対する複数のアプローチの存在を帰結する。

## 2. オリゲネス

### (0) 教父とは誰か

A. 小高毅『古代キリスト教思想家の世界——教父学序説』創文社、1984年。

「ダマスコのヨアンネス（七九九年没）まで続き、彼をもって東方教会最後の教父とされるのである。では、西方教会に目を転じてみよう。ヒッポの司教アウグスティヌスは、四一二年以降、ペラギウスの異端に対処し、数々の著作をなしている。」(14)

「「教父」の概念の基準」

「①教理の面で正統信仰を保持していること (doctrinae orthodoxia)

②聖なる生涯 (sanctitas vitae)

③教会の承認 (approbatio ecclesiae)

④古代教会に属すること (antiquitas)」(20)

「教会の公文書、宣言のうちに信仰の証人として引証されること」(21)

「「教父学」という名称が確立するのは、一六五三年、ルター派の神学者 J・ゲルハルト (Gerhard) の『教父学』(Patrologia) の刊行によるとされている。」(22)

B. ティリッヒ『キリスト教思想史 I』(著作集・別巻二) 白水社、1980年。

「使徒教父とは、新約聖書に直続する最も早い著作者たちであって、彼らのうちの何人かはそれどころか新約聖書の最も新しい文書の著者たちよりも以前に活動したのである。」(53-54)

アンテオケのイグナティウス、『ヘルマスの牧者』の著者ローマのヘルマス、ローマのクレメンス

「弁証家」「組織的なキリスト教神学の創始者」「特定に告発に対する返答という形式において、自己主張した」(65)

反グノーシスの教父、アレクサンドリア学派 (クレメンス、オリゲネス)

### <文献>

1. Johannes Quasten, Pathology, vol.1-4, Christian Classics, 1983-86(1950/1978).

2. Heinrich Kraft, Einführung in die Pathologie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1991.

### (1) アレクサンドリア学派とアレゴリカルな解釈

1. アレクサンドリアにおけるユダヤ教とキリスト教の伝統

ヘレニズムのユダヤ教からヘレニズム・キリスト教へ、都市的精神状況

聖書的宗教とギリシャ哲学の積極的な統合、聖書のアレゴリカルな解釈

→ ギリシャ教父の思索

2. 「アレクサンドリア学派の神学とともにキリスト教信仰の自己意識は、はじめて、二世紀の弁証論者がまず要請としてのみ主張したあの精神的世界妥当性に到達することになった。しかもアレクサンドリア人の神学構想は「反グノーシス主義の教父」(第一節)の神学から二つの点で区別される。第一に異端的グノーシスから「教会的グノーシス」への移行によって、他方においてキリスト教の古代文化との総合によって区別される。」(バイシュラーク下、40)

「グノーシス主義を東方的な輸入品として知っていたにすぎないラテンの西方におけるよりもグノーシスに親近性をもって構想されていた」(40)、「アレクサンドリア人はグノーシスの認識の亡霊を封じ込めるためのまったく新しい可能性を発見した。それは二者択一の可能性ではなく両者を綜合する可能性である」(41)

cf. アンテオケ学派：「歴史的・文献学的研究」「アレゴリカルな解釈に対しては控えめ姿勢」、タルスのディオドロス、モプスエステアのディオドロス、クリュノストモス

3. アレクサンドリアのフィロン：「ギリシア・ローマ人が追求していた救いへの唯一の道を、まさユダヤ教の聖書が教えているのだという確信」、「聖書に二通りの解釈をほどこす。第一の解釈の目的は、聖書の文字どおりの意味を明らかにすること」「当時のギリシアの文法学、文献解釈学」、「聖書の中に、その文字どおりの意味の他に、いっそう深遠な意味が隠されていると信じ、アレゴリー的(象徴的・寓話的)解釈によって、聖書からそれを汲みとろうと努めた。」(出村・宮谷、122)

二段階創造論：可知的世界と人間のイデア、可感的世界と身体的な人間男性のアダムは理性の象徴、女性のエバは感覚の象徴

4. アレゴリカルな解釈

「アレゴリカルな解釈というのは紀元前六一五世紀以来、まずホメロス解釈において確かめられ、次にペルガモンとアレクサンドリアのヘレニズムのアカデミー学園で全盛期を迎え、聖書全般の解釈の支配的なモデルへと展開された多次元の聖書解釈の方法である」、「アレゴリカルな解釈によって、正にこのテキストの中に暗号化されたより高次の知識が発見される。」(シュトゥールマッハー、97)

5. アレゴリカルな解釈は聖書自体にも遡る。

「10 イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。12 それは、／『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである。」13 また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。15 道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16 石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17 自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。18 また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、19 この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。20 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」(マルコ4章)

↓

テキストの意味の多重性の問題。恣意的解釈を避ける方法論、どの意味が基本的か。

## (2) オリゲネス(185-251)

201：父親の殉教

203-205：迫害の時代

211：文法を教える私塾(教理学校)を開く。「回心」の経験。

215：ローマ旅行

217-229、230：アレクサンドリア。『ヘクサプラ』の仕事開始。アラビア旅行

231-232：アンティオキア旅行

233, 245：アテネ

234, 245-247, 249：カエサリア、『殉教について』

248：ニコメディア

249-251：デキウス帝迫害。逮捕され拷問。死。『ケルソス駁論』

「キリストをを目指す精神的・宗教的な教育者」「禁欲的修道制度の模範」（キュンク、70）

## 6. アレクサンドリアのキリスト教学校（カテケーシス学校）

校長：パンタイノス、クレメンス（150頃～211年）、オリゲネス。

ケルソスのキリスト教批判。「この新たな異教の哲学の挑戦に適切に対応するためには、当時の教会で最も有能な頭脳が必要だった」（キュンク、63）。

「キリスト教とギリシア精神の明瞭な和解という意図」「ギリシア精神をキリスト教へと「高める」「すでにパウロにおいて始まっていた異邦人キリスト教的・ヘレニズム的パラダイムが、神学的な完成に至る」（71）

「最初の、方法論的に研究する学者」「聖書の使信をまさに新しい仕方では組織的・神学的に貫徹する」（72）

## 7. キリスト教最初の体系的神学の構築

『諸原理について』

第一巻：神論、墮落論、終末論、天使論

第二巻：キリスト論、聖霊論、魂論、救済論

第三巻：自由意志論

第四巻：聖書解釈

「使徒たちから受け継がれ、守り継がれ、今に至るまで教会のうちに保たれている教会の教え（*Ecclesiastica praedication*）こそ保存されているのである。したがって、教会的・使徒的伝承と食い違っていないことだけが真理にとして信ずべきものである。」（47）

「使徒たちの教え（*praedication apostolica*）によってはっきり伝えられた点」（48）

「これらすべての教えを一連の体系にまとめんと欲する人」「明白な説得力のある論述をもって一つ一つの点に関して真理を探究し、例証並びに論証によって、上述したが如く統一的体系を作らねばならない。」（52）

「オリゲネスが意図したところは、キリスト教教理の徹底的な再解釈であった。それはクレメンスが提唱したキリスト教的覚悟の体系的確立であった。」（有賀・著作集5、145）

## 8. 三一論（神とキリスト、聖霊）

「父なる神のうちに根源的善があると理解すべきであって、そこから生まれた子と、そこから発出した聖霊とは、疑いもなく、父なる神の善性を自らのうちに表現するのであり、この父なる神の善性こそ、泉として父のうちにあり、そこから子が生まれ、聖霊が発出するのである。」（75）

・三位一体の内部（永遠の内在的三位一体）の差異性、「力よりの力」

・三位一体外部（経綸的三位一体）での働きの同一性、「父が万物を支配するのは者であるのは、子を通じて」

「オリゲネスの体系のうち最もむつかしい部分は、キリスト論である。ロゴスは、すべての精神的存在と同じく先在的であり永遠的であるところのイエスの魂と結合する。しかしロゴスは、それを完全に受け入れるこの魂とだけ結合するのである。この魂はロゴスの力と光のなかへとのぼりゆく。」「あたかも」ロゴスが肉体になった「かのように」見える、

ということの意味するのである。こうしてオリゲネスは、養子説(Adoptoonslehre)に近づくわけである。」(ティリッヒ、118)

#### 9. 自由意志論

・罪と裁き・救済の前提としての自由意志

・難問：一見反対に見える聖書箇所、ファラオの場合(神がかなくなにした)、譬えによる語り＝「悔い改めても救われるこのないため」。神の全知・予定・摂理との関わり。

↓

#### 聖書解釈学の問題

「神が配慮を怠ったことに滅びの原因があるのではなく、人間精神の自由な決断(arbitrium)に原因がある」(221)、「神によって与えられた動きを善に向けるか、悪に向けるかは我々による」(225)、「まず個々の人間の行為が原因として先行し、各人がその功績に応じて神から尊い器あるいは卑しい器とされると判断される」(227)

#### 10. 終末論

「ある者は最初の代に、またある者は次の代に、またある者は終りの説きに復帰する」「各々の自由意志による働きと努力によって」、「もともとの天が「変えられる」のであれば、変えられる以上、滅びるのではない」(103)、「敵すら服従すると言われているあの終末。そこにおいて神はすべてにおいてすべてであると言われる至福の終末」(104)

「アポカタスタシス・パントーン」

「下降と再上昇というプラトンの・グノーシス的な構図、および永遠的イデアと時間的現象の間の一貫した区別」(キュンク、74)：

神／ロゴス／聖霊。霊的実在

救済／霊魂／アポカタスタシス

#### 11. 聖書：テキストと解釈

・『ヘクサプラ』：聖書テキスト自体の研究、本文と諸訳との比較。

ヘブル語本文、そのギリシア語読み、アキュラス訳、シムマコス訳、70人訳、セオドチオン訳の6種を並行して記し、その異同を明らかにする。

・聖書テキストに即した解釈方法

人間存在の三重性 → 聖書の意味の三重性：

身体的意味(字義的・歴史の意味)、魂の意味(道徳の意味)、霊の意味(神秘的意味)

→ それぞれの意味にふさわしい解釈方法

霊的意味の発見は、アレゴリカルな解釈による。

・詩編 101.8「朝ごとに、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし／悪を行う者をことごとく、主の都から断ちます。」→文字通りに、「朝ごとに国の悪しき者を滅ぼす」ということではない。「悪しき者」とは「悪を行っている人間」ではなく、「各人の心の中に浮かんでくる邪悪な考えのこと」

12. 「カネンギーサー」「次世代の教会がパラダイムとすべきものを経験した。それは、「現代的なもの」をキリスト教神学の中に受容することである」(キュンク、88)

13. 新プラトン主義的に刻印されたヘレニズムの影響の下で、問題的な「重心移動」

・神と人間の間の本格的な二元論(旧約聖書にも新約聖書にもない)と、この無限の差異を、「神人」キリストを通して乗り越えること。

・キリスト教神学の中心：イエスの十字架と復活 → 受肉

イースター                      クリスマス

＝「キリスト論におけるパラダイム転換」(キュンク、92)

「紀元後三世紀までのキリスト教徒は、一二月二五日をクリスマスとして祝ってな

かった。キリスト教徒は、四世紀の初頭まで、後にキリスト教会の重要な祝日となるこの日に、集まって礼拝を捧げることもなく、キリストの誕生を話題にすることすらなく、他の日と何の変わりもなく静かに過ごしていた」(O・クルマン『クリスマスの起源』教文館、7頁)。

「いつ、どこで、なぜ、他ならぬ一二月二五日に降誕祭が行われるようになったか。これらの問いについて、学者たちはまだ完全な合意に達していないが、年代は三二五年と三五四年の間、場所はローマであることは、ほぼ確実であると考えられている」(37)。

14. 聖書的歴史記述に基づく具体的な救済史から、巨大な救済論的システムへ
  - ・存在論的歴史哲学的
  - ・キリスト教的普遍主義の哲学的基盤

### (3) カップドキアの三教父

オリゲネスの神学的伝統の継承、4世紀の三位一体論争を指導、東方神学の伝統の形成。  
・カエサリアのバシレイオス(大バシレイオス)、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス

#### <参考文献>

1. 『使徒教父文書』《聖書の世界》新約Ⅱ別巻4、講談社。
2. 『中世思想原典集成』平凡社。
3. 『キリスト教教父著作集』全22巻、教文館。
4. 『キリスト教古典叢書』創文社。
5. H. クラフト『キリスト教教父事典』教文館。
6. 小高毅『古代キリスト教思想家の世界 教父学序説』創文社。
7. 有賀鐵太郎「使徒教父」「教父哲学」『信仰・歴史・実践』著作集6、創文社。
8. 水垣渉『宗教的探求の問題』創文社。
9. ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルトまで』新教出版社。
10. ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅰ 古代から宗教改革まで』著作集・別巻二、白水社。
11. H・チャドウィク『初期キリスト教とギリシア思想』日本基督教団出版局。
12. K. バイシュラーク『キリスト教教義史概説』上下、教文館。
13. 芦名定道『自然神学再考』晃洋書房。  
「第一章 古代キリスト教神学の成立と自然神学」
14. オリゲネス『諸原理について』、『祈りについて・殉教の勧め』創文社。
15. 有賀鐵太郎『オリゲネス』(著作集1) 創文社。1943年。
16. 出村みや子『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学——復活論争を中心として』知泉書館、2011年。
17. P. シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
18. V. ロースキィ『キリスト教東方の神秘思想』勁草書房。
19. ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国——小さなメシア運動が帝国に広がった理由』新教出版社。
20. ピーター・ブラウン『古代末期の世界——ローマ帝国はなぜキリスト教化したか』刀水書房。